

昭和 40 年代の電話帳にみる沖縄・ 奄美諸地域における劇場・映画館の変遷

大嶺可代

Looking at Changes in Okinawan/Amamian Theatres according to Phonebooks from 1964 to 1974

Kayo OMINE

I extracted addresses of theatres from phonebooks from 1964 to 1974. These were released by "Ryukyu Telegraph and Telephone Public Corporation" and "Nippon Telegraph and Telephone Public Corporation Kagoshima Branch."

I suggest everyone should use this database to update Okinawan/Amamian cultural history.

はじめに

近年、終戦後から昭和 40 年代後半（いわゆる沖縄の本土復帰前後）にかけて、沖縄各地域ならびに奄美諸島に存在した劇場／映画館の場所・時期を特定していく動きが盛んになってきた⁽¹⁾。しかし、予算面などから現地でフィールドワークがきちんと行えないケースも多く、当時の新聞広告や経営者／観客らの断片的な記憶（エッセイなど）を元に調査が行われる手法が主流であり、正確さに欠けているのではないかという懸念がいまひとつ拭えないのが現状である。

今回、国立国会図書館に所蔵されている『琉球電話番号簿』『沖縄県電話帳』『鹿児島県電話帳』の職業別電話帳に収められた劇場／映画館の情報をデータベース化することにより、昭和 30 年代から 40 年代における沖縄・奄美諸地域の劇場／映画館研究に寄与することを目的とした。

今回用いたのは次の資料である。いずれも国立国会図書館東京本館所蔵。

〈沖縄諸地域⁽²⁾〉

① 『琉球電話番号簿 1964 年 7 月 1 日現在』(琉球電信電話公社)

② 『琉球電話番号簿 1969 年 7 月 1 日現在』(同上)

③ 『沖縄県電話帳 五十音職業別 昭和 47 年 7 月 1 日現在』

(日本電信電話公社沖縄電信電話管理局)

〈奄美諸地域〉

④ 『鹿児島県職業別電話番号簿 昭和 42 年 10 月 31 日現在』

⑤ 『鹿児島県職業別電話番号簿 昭和 43 年 10 月 31 日現在』

⑥ 『鹿児島県職業別電話番号簿 昭和 44 年 10 月 31 日現在』

⑦ 『鹿児島県職業別電話番号簿 昭和 45 年 10 月 31 日現在』

⑧ 『鹿児島県職業別電話帳 昭和 46 年 10 月 31 日現在』

⑨ 『鹿児島県職業別電話帳 昭和 47 年 10 月 20 日現在』

⑩ 『鹿児島県職業別電話帳 昭和 48 年 10 月 20 日現在』

⑪ 『鹿児島県電話帳奄美版 昭和 49 年 4 月 20 日現在』

(以上 日本電信電話公社九州電気通信局)

1.1964 年（昭和 39 年）～1972 年（昭和 47 年）の沖縄諸地域における劇場／映画館の掲載状況（表 1）

劇場／映画館名は基本的に各電話帳の掲載順に沿ってデータ化をすすめナンバリングを行った。

1) 那覇地区

重複のぞき合計 28 件の掲載が確認できた⁽³⁾。琉映系列⁽⁴⁾、オリオン系列、国映系列の各館については、琉映が会社名に続けて各館の名称ならびに電話番号もあわせて掲載しているケースも複数存在する。26 桜坂琉映館は、電話帳では那覇市牧志 2-208、『ゼンリン住宅地図 1969 年』に那覇市牧志 1-208 とあるが地図の地番誤表記と考えられる。

6 小禄銀映の住所が①高良 100 番地から②③では高良 89 番地に変わっているが、移転によるものなのか区画整理等による地番変更かは調査中で

表 1 沖縄諸地域における劇場／映画館登載状況

	住所	資料①	資料②	資料③
1	那覇市安謝264	安謝劇場	安謝劇場	
2	那覇市安里10	琉映本館	琉球映画貿易株式	琉球映画貿易株式
3	那覇市寄宮164	寄宮国映	寄宮国映	
4	那覇市寄宮183	寄宮琉映館	寄宮琉映館	
5	那覇市鏡原3-4	小禄琉映	小禄琉映	小禄琉映
6	那覇市高良100	小禄銀映		
6	那覇市高良89		小禄銀映	小禄銀映
7	那覇市高良50	小禄劇場		
8	那覇市山下1-204	ペリー琉映	ペリー琉映	
9	那覇市松山1-1	文化座		
10	那覇市松尾2	国映館	国映館	国映館
11	那覇市前島2-147-17	若松国映	若松国映	若松国映
12	那覇市前島2-147-17			国映アドセンター
13	那覇市大中1-5		首里劇場	首里劇場
14	那覇市鳥堀1-19	首里有楽座(合名)	首里有楽座(合名)	首里有楽座(合名)
15	那覇市壺屋278	真和志琉映館	真和志琉映館	真和志琉映館
16	那覇市壺屋284-2	あけぼの劇場	あけぼの劇場	あけぼの劇場
17	那覇市樋川41	開南琉映	開南琉映	開南琉映館
18	那覇市牧志1-770	沖映本館	沖映本館	沖映本館
19	那覇市牧志1-770	ニュー沖映館		
20	那覇市牧志1-770	平和館	平和館	
21	那覇市牧志1-779	南映劇場(合資)	南映劇場(合資)	
21	那覇市牧志1-773			南映劇場(合資)
22	那覇市牧志1-784	沖縄東宝劇場	沖縄東宝劇場	
22	那覇市牧志1-789			沖縄東宝劇場
23	那覇市牧志2-116	国際琉映	国際琉映	
23	那覇市牧志2-116	国際琉映館		国際琉映館
24	那覇市牧志2-180	グランドオリオン		
25	那覇市牧志2-180	桜坂オリオン	桜坂オリオン座	桜坂オリオン座
26	那覇市牧志2-208	桜坂琉映		
26	那覇市牧志2-208	桜坂琉映館	桜坂琉映館	桜坂琉映館
27	那覇市牧志2-67	グランドオリオン	グランドオリオン	グランドオリオン
28	那覇市与儀西原562-2	大洋琉映		
28	那覇市与儀西原562-2	大洋琉映館		
28	那覇市与儀562-2		大洋琉映館	
29	糸満町(市)字糸満1413	南部オリオン	南部オリオン	
29	糸満町(市)字潮平590			南部オリオン
30	糸満町(市)字糸満1413	南部沖映館		
31	糸満町(市)字糸満1434	南部東映館		
32	糸満町(市)字糸満967	糸満国映館		
33	与那原町与那原3110-2	与那原沖映	与那原沖映館	与那原沖映館
34	与那原町与那原3120	もなり座	もなり座	
35	(島尻郡) 南大東村在所区3班	大東映画館	大東映画館	大東映画館
36	浦添村(市)屋富祖230	浦添沖映館	浦添沖映館	浦添沖映館
37	浦添村(市)屋富祖236	浦添琉映館	浦添琉映館	浦添琉映館
38	浦添村(市)屋富祖301	浦添オリオン座	浦添オリオン座	浦添オリオン座
39	宜野湾市普天間138	グランドパレス	グランドパレス	グランドパレス

40	宜野湾市普天間495	開放地琉映館	開放地琉映館	開放地琉映館
41	宜野湾市普天間564	普天間沖映		
42	宜野湾市普天間586	普天間琉映		
43	コザ市照屋58	十字路オリオン座	十字路オリオン座	
43	コザ市越来28			十字路オリオン座
44	コザ市胡屋2		胡屋オリオン座	胡屋オリオン座
45	コザ市胡屋一里根原1353	胡屋オリオン座	胡屋オリオン座	
45	コザ市胡屋1353			ゴヤオリオン
46	コザ市胡屋1611	キャピトル館		
47	コザ市胡屋29	胡屋琉映館	胡屋琉映館	胡屋琉映館
48	コザ市山里75	島袋琉映館	島袋琉映館	島袋琉映館
49	コザ市照屋13	コザ沖映新館	コザ沖映新館	コザロキシー
50	コザ市照屋46	コザ琉映館	コザ琉映館	コザ琉映館
51	コザ市照屋61	第一セントラル 琉映館	第一セントラル 琉映館	第一セントラル 琉映館
52	コザ市照屋後原5	十字路国映館	十字路国映館	十字路国映館
53	コザ市上地1817	園見国映館	園見国映館	
54	コザ市上地247	中部沖映館		
55	コザ市諸見里1149	ピカデリー国映	ピカデリー国映	ピカデリー国映
56	コザ市諸見里188	パルム座	パルム座	
57	嘉手納村嘉手納259	嘉手納琉映館	嘉手納琉映館	嘉手納琉映館
58	嘉手納村嘉手納286	嘉手納沖映館・ 国映館	嘉手納沖映館・ 国映館	嘉手納沖映館・ 国映館
59	嘉手納村嘉手納287	嘉手納第二東映館	嘉手納第二東映館	
60	読谷村波平39	読谷沖映館	読谷沖映館	読谷沖映館
61	具志川村(市)安慶名482	安慶名国映館		
62	具志川村(市)安慶名527			安慶名沖映館
63	具志川村(市)安慶名528	安慶名沖映館	安ゲ名沖映館	安ゲ名沖映館
64	具志川村(市)田場510	安慶名琉映館	安慶名琉映館	安慶名琉映館
65	石川市上間松男			石川琉映
66	石川市石川363	石川沖映		
67	石川市石川625	石川国映館	石川国映館	石川国映館
68	石川市石川684	石川オリオン	石川オリオン	石川オリオン
69	勝連村平安名1612	与勝琉映館		
70	名護町(市)字名護369	名護映画劇場		
71	名護町(市)字名護615	北部沖映館		
72	名護町(市)字名護629	名護国映		
72	名護町(市)字名護692		名護国映	名護国映
73	名護町(市)字名護630	名護琉映館	名護琉映館	名護琉映館
74	金武村金武419	金武琉映	金武琉映館	
74	金武村金武528			金武琉映館
75	国頭郡 今帰仁村仲宗根279	今帰仁沖映		
76	国頭郡本部町渡久地139	本部劇場	本部劇場	本部劇場
77	国頭郡 本部町渡久地142-1	本部沖映		
78	国頭郡伊江村東江前116	江の島劇場		
78	国頭郡伊江村東江前14		江の島劇場	
79	国頭郡国頭村辺土名114	辺土名琉映画	辺土名琉映	
80	国頭郡国頭村辺土名1437	国頭映劇	国頭映劇	

81	平良市下里565	宮古琉映館	宮古琉映館	宮古琉映館
82	平良市西里157	沖映館	沖映館	
83	平良市西里158			まいなみ劇場
84	平良市西里220		第二琉映館	
85	平良市西里239	国映館		
86	平良市西里293		国映館	国映館
86	平良市西里297	平和館		
87	平良市西里56	とみや会館	とみや会館	とみや会館
88	平良市字池間229	池間映画館		
89	(宮古郡) 多良間村塩川201		羽地映劇場	羽地映劇場
90	石垣市石垣21	国際館	国際館	
91	石垣市石垣36-1	万世館	万世館	万世館
92	石垣市大川200-1	八重山沖映本館	第一琉映	琉映館
93	石垣市大川204	丸映館	丸映館	丸映館
94	石垣市登野城32	大勝劇場	大勝劇場	大勝劇場

ある。同様に 22 沖縄東宝劇場の掲載地番も①②と③では異なるが、移転してないはずなので地番変更あるいは誤植かもしれない（数字の 3、8、9 は互いに間違えやすく、また数字の 1 と 7、4 と 9、5 と 6 も誤記しやすい）。ちなみに近隣の 21 南映劇場の地番も①②と③で異なっている。

10 若松国映館と同じ番地に「国映アドセンター」とあるが詳細は不明。グランドオリオン⁽⁵⁾という映画館名は①では 2 件登録され、そのうち 24 牧志 2-180 番地については桜坂オリオンと同番地で掲載されているが電話番号が異なる。

18 沖映本館と 20 平和館の電話番号が同じ番地に登録されているが、平和館は少々離れた場所に存在していたので業務上の連絡回線をまとめたのかもしれない。なお 23 国際琉映館について、③に掲載されているものの 1970 年に閉館したことが先行研究で確認できるため掲載ミスと思われる⁽⁶⁾。

2) 島尻郡（那覇・浦添を除く本島南部地区）

合計 7 件の掲載が確認できた⁽⁷⁾。糸満地区⁽⁸⁾では当初、30 南部沖映と 29 南部オリオンが同じ番地に登録されている（同番地は比較的範囲が広く電話番号が異なる）が、1969 年には南部オリオンのみとなり、その後、字潮平へ移転したらしい。南大東島の行政区画は島尻郡なのでこちらで数に加えた。映画は島最大の娯楽として長い間存続したと推測できる。

3) 浦添宜野湾地区⁽⁹⁾

合計 7 件の掲載が確認できた。いずれも屋富祖や普天間といった米軍基地に隣接する歓楽街にあった⁽¹⁰⁾。現在、映画研究家の當間早志氏が当時の 37 屋富祖琉映館経営者である宮城三吉氏に取材中とのことで、続報が待たれる。

4) コザ地区⁽¹¹⁾

合計 14 件の掲載が確認できた⁽¹²⁾。①②でコザ十字路に所在確認できる 43 十字路オリオン座⁽¹³⁾は③では越来の住所で掲載されているが、地番変更の可能性がある。胡屋オリオン座という名称の映画館が胡屋に 2 軒混在しているが、胡屋一里根原 1353 番地の 45 胡屋オリオン座は『1968 年コザ市地図』に見当たらない。56 パルム座について、『沖縄時報』1967 年 8 月 1 日 7 面に「映画館が火事 きのおコザで」との見出しで「7 月 31 日午前 4 時 20 分頃、コザ市諸見 230、映画館パルム座」と報じられているが、①②では「コザ市諸見里 188」で掲載されている。48 島袋琉映は 2007 年まで、50 コザ琉映は 2016 年まで営業していた⁽¹⁴⁾。

5) 中頭郡（宜野湾・コザを除く本島中部地区）⁽¹⁵⁾

合計 13 件の掲載が確認できた。③で「62 安慶名沖映」と「63 安ゲ名沖映」の名前が隣り合わせの地番で 2 件登録され、電話番号も異なるため別個に集計した⁽¹⁶⁾。64 安慶名琉球映館の住所が①②③とも具志川村（市）田場 510 番地になっているが、『ゼンリン住宅地図 1978 年』において安慶名 510 番地に掲載が確認できる。65 石川琉映の住所が「上間松男」となっているが詳細不明。

以下、大嶺が 1998 年に現地調査を行っているので付記する。電話帳に掲載された状況とは異なる点もあるがそのまま記述した。

〈61 安慶名国映〉

経営者は古我地昌繁氏。1899 年（明治 32 年）生まれ。当時は古我地氏をはじめ何名かで経営していた。安慶名国映館は 1949 年～67 年ごろまであった。当時、映画館は安慶名と石川に 2、3 ヶ所しかなく、与那城や勝連からも客が来た。国映系なので洋画を上映、フィルムはグランドオリオンや国映館、また

大宝館（後の沖縄東宝劇場）も国映系だったので、そこからのフィルムも上映していた。西部劇やミュージカルも上映していたらしい。イタリア映画、フランス映画の固定客もいたが、アメリカ映画の方が客の入りは良かったようだ。また、あげな小学校や田場小学校（具志川小学校も？）からの団体見学で、歴史映画（アニメーション）の上映もしたことがあった。映画館は2階建て。1階は椅子があり、200名以上入った。2階はスクリーンをコの字型に囲うように畳が敷き詰められた（後に椅子席になった）。合計して500～600名は入ったのではないかとのことである。テレビの影響で客足が遠のき閉館となった。古我地氏は72～3歳で亡くなられたという⁽¹⁷⁾。

〈64 安慶名琉映〉

経営者は与那覇盛吉氏(1923年6月20日生まれ)。具志川市議を7期務めた。安慶名琉映は当時具志川村田場2519番地にあった。1952年（昭和27年）6月9日経営開始。当時、平良川に琉映館があったので買収して安慶名に持ってきた（金額は70万）という⁽¹⁸⁾。2階建てで、1階は真ん中に4列あり、500名ぐらい座れた。2階は畳敷きで200名以上。いままでに立ち見を合わせて1000人入ったこともあるとのこと。入場料は琉映本部と折半（フィルムの借り賃4日分として）、その折半したものに興行税がかかり、50%取られた。また、冷房設備を入れたら客が2、3名でもクーラーを掛ける必要があるのでも月に100ドルも取られた。当時の冷房は維持費もかかったという。

赤木圭一郎や石原裕次郎の作品、「里見八犬伝」はよく客が入った。なお、良い作品は宣伝カーで街頭を廻った。警察の許可が必要だった。大きい看板は本社のみで、あちこちに貼るぶんは与那覇氏が自分で描いた。また、本社からポスター貼りが立ち会いとして一人来た。

映画館には映写技師と助手がいた。映写技師は免許制で一級・二級とあり、給与が高かった。

安慶名琉映では照屋林助のワタブーショウをやったこともある。よく客が入った。文部省の奨励で小学校の団体映画見学があった。田場小学校や具志川小中学校が来たが、子供は1席に2名座ったらしい。1973年（昭和48年）7月3日に閉業した⁽¹⁹⁾。

6) 名護地区

合計4件の掲載が確認できた。72名護国映⁽²⁰⁾の住所は①では字名護629番地、②③では字名護692番地になっている。どちらかが誤植の可能性が高い。

〈73名護琉映〉

大嶺が1998年旧名護シアターの又吉良全氏に行ったインタビューによると、ここは第二琉映であり、2階建て木造建築であった。宇茂佐からマイクロバスでフィルムを運んだ。映画館だが冷房がなく、ボックスに販売用のベストソーダを詰め、その排気にさらに氷を当て冷房代わりに客を冷やしていた。又吉氏は1963年から23年間名護琉映の映写技師を務めていたが、「愛と死を見つめて」で約1000人入ったときには、2階から客が落ちないか肝を冷やしながら映写を行っていたとのことである。

7) 国頭郡（名護を除く北部地区）

合計7件の掲載が確認できた。繁華街である名護から離れている地域特性のためか、金武、本部、辺土名地域で復帰後も劇場／映画館が営業していたことを確認できた。74金武琉映館の住所が①②と③で、78江の島劇場の住所が①と②で異なるが詳細不明。

8) 先島諸地域

宮古地区⁽²¹⁾で8件、八重山地区で5件の掲載が確認できた。特筆すべきなのは、数多くの離島からなる八重山地区において劇場／映画館は石垣旧四箇村⁽²²⁾地域のみの掲載であるのに対し、宮古地区では周辺離島である池間島⁽²³⁾ならびに多良間島に映画館が1軒ずつ掲載されていること、そのうち多良間島の映画館は復帰後も存続したと思われることである。

以下、大嶺が1998年に石垣島で現地調査を行っているので付記する。戦前の様子についても聞き取りが行えた。

〈石垣字登野城^{たいしやう} 94大勝劇場〉(写真1)

飯田マハツさんによると、この劇場は戦前から小屋があった。名前の由来は画数で縁起を担ぐためという。みつわ座、ときわ座、大伸座、劇団与座、翁長座、

天川劇団などが興業を行い、遠く白保、大浜、新川からも東バスや山田バスを利用して客が詰めかけたという。近所にはいつもうるさく迷惑を掛けていたため招待券をサービスしていた。劇場は板敷きにゴザを敷き詰めており、座布団があった。100～200名入った。



(写真1) 大勝劇場の建物と
飯田マツさん(写真左端)

飯田さんは昼はパイン工場で働き、夜は劇場で札売りをしていたため周囲から「フダウヤーオバサン」と呼ばれた。また劇場内で売店も取り扱った。パンやジュース（丸具商店のサンコーラなど）、たばこを置いてあった。給料は月10ドル。売った札は最終的に劇場主の富川氏が計算した。富川氏は目が不自由であったがとても頭が良く、物の置き場所を全て記憶していた。計算もきちんと合わせてきたため、決してごまかしはきかなかったという。

〈石垣字石垣 千歳座 後に千歳館〉

万世館経営者の山城興常氏は1925年（大正14年）に千歳座を新築した。建築経緯は山城氏の自伝に詳しい⁽²⁴⁾のでここでは簡潔に記すと、昭和10年ごろ競売に出されていた料亭（住所は字石垣長田次良若33-1番地）を劇場にしようと思い立った山城氏は、球陽座の渡嘉敷守良や鉢嶺喜次と話し合って建築に踏み切った。劇団との約束で、旧5月4日のハリュウ船にこけら落としを行った。この劇場には渡嘉敷や、イシミネという役者、そして子役に大宜見小太郎が出ていたという。戦前この劇場によく足を運んだ森田孫栄氏によると、千歳座は木造2階建てで瓦葺き。観客席は床にむしろ敷きだったが後にベンチになったらしい。沖縄芝居の翁長、大宜見などが記憶にある。収穫時期には毎日満員を記録した。400人くらい入ったかも知れないとのことであった。

ふたたび山城氏の証言に戻るが、戦後千歳館の成立は1945年である。木造2階建て、有蓋、後に瓦ぶきとなった。映画はヤミでフィルムを手に入れた。「脛の母」「鞍馬天狗」「神州天馬侠」「踊る竜宮城」などを上映。弁士は沖縄の寄留民でヤマダ、セナハなどが担当した。沖縄芝居では梅劇団の名城（南洋デブ）や大宜見小太郎、真喜志康忠がやってきた。氏は1963年8月8日、道路拡張に伴い撤去したと語った。

〈石垣字石垣 91 万世館〉

大正時代は歌舞伎座という劇場だった。調査の際、森田孫栄氏が「黒島鳴潮」という名を出されたが経営者の名前か役者の名前か定かでない。1924 年（大正 13 年）に台風がやってきて新築 4、5 年だった歌舞伎座は倒壊⁽²⁵⁾。その後建て直し営業を続けたが、千歳座の人気に押されたため 1929 年（昭和 4 年）八重山館という映画館へ衣替えした⁽²⁶⁾。

山城氏によると、当時は木造 2 階建て。映写室はコンクリート造り（？）観客席の後ろに設けられていた。観覧料は 1 階が 10 銭、2 階は特等のため追加で 5 銭出た。無声映画だったのでササキという弁士と伴奏（演奏家）が 4～5 名いた。ブラスバンド風でトランペットやドラムもあった。彼らは上映前、映写室の上（もちろん外から丸見え）に上がり、客引きのため宣伝用のテンポの速い音楽をずっと演奏していた。上映が始まるとオーケストラボックスに入って、映像にあわせた音を奏でていた。なお時代劇の場合は歌舞伎の「勧進帳」で使われる長唄の部分を演奏していた。

万世館は八重山館の敷地を山城氏が買い取り 1953 年（昭和 28 年）7 月に開業した。「ばんせいかん」と呼んでいたが後に「まんせいかん」となった。『八重山毎日新聞』1990 年 5 月 30 日付に道路拡張に伴う取り壊しの模様を撮った写真が掲載されている。その後移転し 1999 年 9 月 30 日閉館した。

2.1967 年（昭和 42 年）～1974 年（昭和 49 年）の奄美諸地域における劇場／映画館の掲載状況（表 2）

残念ながら名瀬地区中心部を除き掲載住所は集落名のみである。本論では当時の電話局管轄地区から推定して集計作業を行った。

1) 奄美大島名瀬市

合計 6 件の掲載が確認できた⁽²⁷⁾。2 中央会館の住所が⑩⑪で異なり、移転したと思われる。5 桜岳興業奄美支部も⑩⑪で住所が異なるが詳細は不明。1 朝日館（写真 2）は『ゼンリン住宅地図 1972 年』では名瀬文化会館、また 3 名瀬新栄館も名瀬東映館と表記されている。電話帳④⑤によると「元英七」の名前が名瀬幸町に掲載されているが、電話帳⑥⑦以降は喜界島赤連に同名で記

表 2 奄美諸地域における劇場／映画館登載状況

住所	資料④	資料⑤	資料⑥	資料⑦	資料⑧	資料⑨	資料⑩	資料⑪
1 名瀬市伊津郡11	朝日館	朝日館	朝日館	朝日館	朝日館	朝日館	朝日館	朝日館
2 名瀬市末広9	中央会館	中央会館	中央会館	中央会館	中央会館	中央会館	中央会館	中央会館
3 名瀬市末広12	名瀬新栄館	名瀬新栄館	名瀬新栄館	名瀬新栄館	名瀬新栄館	名瀬新栄館	名瀬新栄館	名瀬新栄館
4 名瀬市幸16	元英七	元英七						
5 名瀬市入舟7					桜岳興業奄美支部			
5 名瀬市金久7-10						桜岳興業奄美支部		桜岳興業奄美支部
6 名瀬市佐大熊				奄美映劇	奄美映劇	奄美映劇	奄美映劇	奄美映劇
7 大島郡笠利町中金久	赤木名映劇	赤木名映劇	赤木名映劇	赤木名映劇	赤木名映劇	赤木名映劇	赤木名映劇	赤木名映劇
8 大島郡瀬戸内町朝日	藤谷達雄	藤谷達雄	藤谷達雄	藤谷達雄	藤谷達雄	藤谷達雄	藤谷達雄	藤谷達雄
9 大島郡瀬戸内町松江					中央館	中央館	中央館	中央館
10 大島郡喜界町赤連	昭和映劇	昭和映劇	昭和映劇	昭和映劇	昭和映劇	昭和映劇	昭和映劇	昭和映劇
11 大島郡喜界町伊仙		元英七	元英七	元英七	元英七	元英七	元英七	元英七
12 大島郡徳之島町亀津	太洋映劇	太洋映劇	太洋映劇		平山信成	平山信成	平山信成	平山信成
13 大島郡徳之島町亀津								
14 大島郡徳之島町亀津	徳之島東映	徳之島東映	徳之島東映	徳之島東映		徳田徳里	徳田徳里	徳田徳里
15 大島郡徳之島町亀津					徳之島映劇	徳之島映劇	徳之島映劇	徳之島映劇
16 大島郡徳之島町亀津					松竹館	松竹館	松竹館	松竹館
17 大島郡天城町平土野		松竹館	松竹館	松竹館	松竹館	松竹館	松竹館	松竹館
18 大島郡天城町平土野		東映館	東映館	東映館	東映館	東映館	東映館	東映館
19 大島郡徳之島町母間・山					東映館	東映館	東映館	東映館
20 大島郡泊町和泊		沖映館	沖映館	沖映館	沖映館	沖映館	沖映館	沖映館

載がある。おそらく同一人物が何らかの理由で喜界島へ居住を移したと推測できる。

2) 大島郡笠利町

7 赤木名映劇 1 件のみ確認できた。名瀬から遠隔地であったためか長く興行をおこなったと推測できる。



(写真2) 朝日館跡。現在はパチンコ店になっている。

3) 大島郡瀬戸内町

朝日地区（詳細不明）と古仁屋松江地区に 1 件ずつ計 2 件確認できた。これらの劇場／映画館には近接する加計呂麻島からも客足があったと考えられる。

4) 喜界島

計 2 件確認できた⁽²⁸⁾。いずれも港のある赤連地区にあったようだ。名瀬市の項に述べたが「元英七」は名瀬地区からの移住であろう。

5) 徳之島

合計 8 件（徳之島町亀津地区に 4 件、徳之島町母間の山地区に 1 件、伊仙町伊仙に 1 件、天城町平土野地区に 2 件）確認できた。亀津地区の 4 件については④⑤⑥に 2 件、⑦⑧に 1 件のみ、⑨⑩⑪に 2 件の掲載である。業務移譲などなんらかの関係があったかもしれないが、電話番号も全く異なり住所も未詳のため推測の域を出ない。

6) 沖永良部島

和泊地区に 20 沖映館 1 件のみ確認できる。2016 年に大嶺が現地調査を行った。

〈20 沖映館〉

『わどまり商工誌』（昭和 61 年 4 月発行）によると、「（株）和泊文化センター⁽²⁹⁾ 解散の翌年 昭和 42 年（1967 年）、（現在の沖えらぶシーサイドホテルの 1 階に）映画館をオープンした。土日祭日に昼夜 2 回上映、客層は高校生を中心

に20～30人」と述べられている。実際大嶺は「当時沖映館で映画を観た」という話を和泊・知名の人々から幾度も耳にしている。ある知名の住民は高校生の頃「エマニエル夫人」を観にバスに乗って和泊へ来たという。

館長だった古波倉正生氏はインタビューで、『君の名は』を上映したが文芸的で庶民には難しかったようだ。色のついた作品のほうが受けがいい。沖縄芝居もよく来たよ。乙姫、与座、大伸座。双子の劇団も来ていた。みんな私が呼んでやったんだよ。あのころ、ここらでは客席、舞台、楽屋がそろっている設備はうしかなかったから」と述べている⁽³⁰⁾。沖映館は1985年（昭和60年）7月に閉館した。

なお、沖永良部島では和泊に「瑞三劇場」、知名に3軒、他地域にも映画館があったことを確認している⁽³¹⁾。

総括および今後の展望

今回作成した電話帳データベースによって、数々の劇場／映画館の所在地とその時期を明らかにできる「ある程度」の手掛かりを提供できたことに異論の余地はないと思われる。

しかしながら、このデータベースは戦後沖縄・奄美諸地域における事実の一部分を指し示すものであり、必ずしも劇場／映画館活動の全体を表すものではないことに我々研究者は留意しなくてはならない。

反証1：同時代に存在した著名な劇場のほとんどは電話を所有していなかった

当時乙姫劇団に在籍していた女優の森多賀子によると、「電話の置いてある劇場はむしろ珍しかった。例えばコザ自由劇場なんて劇場主の潮平さんが芝居好きなお母さんのために作っただけのハコだから、そもそも電話なんて必要がなかったね。だいたい地方の劇場なんて、劇団がいつ頃来るかって決めるのもテーゲーに決めてたし。あらかじめ決めていた日に劇団が来なかったら、台風とかで来ないんだはずとかしか思わない、連絡も取らないで1ヶ月くらいは来るの待ってるわけさー」⁽³²⁾と述べている。

傍証として、当時那覇市の中心部で文化の発信源である那覇劇場の名が電話

帳に一度も掲載されていない点を指摘しておこう。1965年に乙姫劇団が大入り満員を出しているにもかかわらず、那覇劇場はその名称で固定電話を設置する必要性を感じていなかったのだ⁽³²⁾。

もっとも、地区（特に島嶼地域）によっては、劇場は本島と地区を結ぶ重要な情報拠点となり得た。港に面して建てられた劇場（宮古島・87とみや会館など）では、船舶発着時には物資輸送に関する重要な連絡網の一部であったため電話が設置されていた。しかし復帰時期のみならず、21世紀に入ってから、携帯電話が一般に普及するまで固定電話加入権として8万円近く支払うのが相場であった⁽³³⁾。それほどまでに電話というものは緊急時を除き、一部のお金持ちのみが使用するコミュニケーション手段であり、庶民にとっては高嶺の花であり続けた。

固定電話は、正確かつ迅速なフィルム貸借のやりとりが興行成績を左右する都会の映画館にとっては必要なツールであったが、多くの劇場において、また一部の奄美島嶼地域の映画館においては、むしろ手紙や電報でのやりとりが電話に勝るものとして活用されていたと考えられるのである。

反証2：『電話帳』に掲載された住所と実際の劇場／映画館の所在地が異なる事例が存在する

わかりやすい例として58嘉手納沖映館と嘉手納国映館をあげておく。電話帳ではひとまとまりで掲載されているが実際は少々離れて別々の場所で営業されていた。経営者が同一人物であったためこのようなことが起きたと推測される。

反証3：劇場／映画館がすでに存在していないにもかかわらず『電話帳』に掲載されている、あるいは存在しているが電話帳に掲載されていないケースが存在する

③において当時すでに閉館して1年以上経過している23国際琉映館の電話番号が掲載されていた。単純に掲載ミスと思われるが、同じような例が他にもあるかもしれない。逆のケースとして池間島の映画館は電話帳へ掲載が①のみであったが、地域誌ではその後しばらく存在が確認できる。電話契約を打ち切っ

たのか、あるいは個人名義へ変更したのか、疑問が残る。

反証4：米軍基地内の劇場／映画館の情報が皆無である

米軍基地は琉球電信電話公社の管轄外であるため当然ながら基地内部の劇場／映画館は全く掲載されていない⁽³⁴⁾。

以上、現時点で考えられる反証をあげたが、これらは本データベースの昭和40年代における劇場／映画館の動向を示す公的資料としての位置づけを損ねるものではない。また『電話帳』は、当時新聞掲載されることがほとんどなかった奄美島嶼地域（喜界島・徳之島・沖永良部島）における劇場／映画館の存在を確認できる唯一の公的資料といえるものである。本データベースが適切に活用され、沖縄／奄美諸地域における文化研究が一層掘り下げられることを祈念して止まない。

謝辞

論文作成にあたり、20年前に快くインタビューに応じてくださった古我知清司さん、与那覇盛吉さん、又吉良全さん、飯田マハツさん、山城興常さん、森田孫栄さんに御礼申し上げます。同じく3年前、「沖えらぶシーサイドホテル」へ押しかけた私のぶしつけな質問にも丁寧にご応対くださった古波倉正生さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。元乙姫劇団員森多賀子さんには数度確認インタビューを行いました。皆様ありがとうございます。

沖縄映画研究家の真喜屋力さん、平良竜次さん、當間早志さんからはwebサイト「沖縄映画興行伝説」、google社の地図機能を活用した「沖縄映画興行伝説MAP」のご提供など多大なご協力を賜りました。また森谷大介さん、松田良孝さん、宇根底洋子さんからは貴重な資料をご紹介いただき大変感謝しております。

最後に、この論文の沖永良部島の項につきまして、平成28年度科学研究費助成事業・奨励研究（課題番号：16H00005）の補助金による研究成果の一部であることを明記して終わります。

註

- (1) 山里将人『アンヤタサ！沖縄・戦後の映画1945～1955』ニライ社 2001年、世良利和『米軍統治時代の沖縄映画史—興行、制作、受容の独自性をめぐって— 三菱財団2014年度研究助成プログラム成果報告』蜻文庫 2016年、など。
- (2) 国立国会図書館には『宮古・八重山電話番号等改訂版 1967年5月1日現在』（琉球電信電話公社）が所蔵されているが今回は未調査。
- (3) ①に「高安六郎プロダクション」が記載されているが集計に含めていない。
- (4) ①に琉球映画の事務所として栄町338という住所が掲載されている。
- (5) 「県内映画館巡り」『琉球新報』1988年1月28日付記事にて「もとの那覇市役所をつぶして建てられた」と注記あり。
- (6) 平良竜次・當間早志『おきなまぼろし映画館』『アーニーパイル国際劇場』の項では閉館日を1970年5月8日としている（ボーダーインク 2014年）。平良氏から直々に「電話帳掲載ミスではば間違いない」とご助言いただいた。記して感謝したい。
- (7) 与那原モナリ座について平良竜次「沖縄まぼろし映画館」『琉球新報』2016年5月10日付に掲載されている。
- (8) 糸満町は1971年12月に糸満市へ昇格。
- (9) 浦添村は1970年7月に浦添市へ昇格。1971年（昭和46年）5月に宜野湾局から那覇局へ管轄が移されたため、①②では宜野湾局、③では那覇局に掲載されている。
- (10) 普天間地区にあった映画館についての最新報告は平良竜次「沖縄まぼろし映画館」『琉球新報』2018年2月9日、5月11日、7月13日、9月14日に掲載されている。
- (11) コザ市が合併により沖縄市となったのは1974年であるため、ここではコザ地区として紹介した。
- (12) コザ地区にはほかに「ワタブーショー」「当間プロダクション」「喜納昌永民謡クラブ」の掲載がある。漫談などを行う商業空間や民謡酒場を劇場と捉えることも可能ではあるが今回は集計に含めていない。
- (13) 『KOZA BUNKA BOX』（沖縄市役所発行 2017年）第13号2p.には1956年に撮影された十字路オリオン座と第一セントラル琉映の写真が掲載されている。
- (14) 『KOZA BUNKA BOX』第13号6p. 島袋琉映館の写真(1960年代撮影) およびキャプション参照。なお同誌には平良竜次・當間早志両氏による「ローカルレポート 沖縄市における戦後沖縄興行史」が掲載されているので参照されたい。
- (15) 具志川村は1968年7月に具志川市へ昇格。
- (16) 安慶名沖映に関しては平良竜次「沖縄まぼろし映画館」『琉球新報』2017年12月8日付にて、読谷沖映に関しては2017年11月10日付にて取り上げている。
- (17) 古我地清司氏（当時：具志川市役所職員）の証言による。安慶名琉映の与那覇盛吉氏によれば、古我地昌繁氏は教員だったとのこと。また、旧名護シアターの又吉良全氏は、「安慶名国映で映写技師をやっていた時、米軍の電波がトーキーに入っていたいへんだった」と述べている。
- (18) 与那覇氏が述べたこれらの経緯は、1954年にこの映画館の撮影記録があったとした『沖縄まぼろし映画館』『平良川琉映館』の項の記述と矛盾している。新資料の掘り起こしに期待したい。
- (19) 以上、与那覇盛吉氏の証言による。なお与那覇氏によれば、赤野出身の阿嘉エイホウ氏が経営する劇場も近隣にあったが、のちに与那覇氏が買収し第二琉映にした。閉館後は

靴屋になったとのこと。

- (20) 名護琉映と名護国映は互いに真向かいに位置していたという。「県内映画館巡り」『琉球新報』1988年5月19日、6月2日付記事参照。
- (21) 「県内映画館巡り」『琉球新報』1988年6月16日朝刊で宮古国映館を取り上げている。
- (22) 『電話帳』に掲載はないが当時、石垣旧四箇村各地に南宝劇場、千歳座、白保屋劇場（別名：新成劇場）といった劇場が存在した。平良とみ・平良進両氏によるインタビュー記事「やいまインタビュー」『情報やいま』2007年6月号 <https://yaimatime.com/interview/4417/>（2018年9月22日閲覧）
- (23) 『沖縄池間民族誌』67-68pp. 未来社1972年に、1972年当時池間島に映画館が2軒あり、平良の映画館からフィルムを借りて上映しているとある。なお池間島水浜地区には1961年にはセンター劇場が存在したとされる。『バガンマリズマヌコヨミ2019 わたしのしまのカレンダー池間島』（NPO法人いけま福祉支援センター）参照。
- (24) 『山城興常伝』1983年 非売品。うるま市立図書館、石垣市立図書館蔵。
- (25) 『山城興常伝』287p.
- (26) 森田孫栄「八重山における商業演劇（沖縄芝居）」の項、ならびに三木健「映画」の項参照。『石垣市史 各論編 民俗 下』2007年
- (27) 矢之脇町に「ワールドプロダクション」の掲載があるが詳細不明のため今回は集計に含めていない。
- (28) 赤連に「安岡プロダクション」の掲載があるが詳細不明のため今回は集計に含めていない。
- (29) 現在の和泊市立図書館にあった施設で映画も上映した。
- (30) 2017年1月28日インタビュー。
- (31) 大嶺可代「近現代の沖永良部島における劇場／映画館の変遷—終戦直後期から昭和30年代を中心に—」『沖縄芸術の科学』第29号 2017年
- (32) 2018年6月14日インタビュー。
- (33) 森の証言によると「那覇劇場の売店には電話が置いてあった」。たしかに那覇劇場経営者・仲本清智名義で1964年琉球電話番号簿50音順編那覇市の項には「(那覇市)樋川57」として那覇劇場と同一住所が掲載されている。
- (34) 「施設設置負担金の見直しについてのご説明」NTT西日本ウェブサイト <http://www.ntt-west.co.jp/basic/charge/nesage/futan2.html>（2018年9月22日閲覧）。なお、実際に固定電話を使用するためには電話工事費や月々の基本使用料が必要なため、初期費用として10万円を超える金額を要求されるケースも少なからずあった。
- (35) 米軍基地内外の芸能空間についてはライカム構内の事例などを含めた次の論考がある。三島わかな「都市における芸能空間 劇場・ホール等の展開」『沖縄市史第3巻 民俗編』1069-1090pp.（沖縄市役所市史編纂室 2015年）。また、『沖縄まぼろし映画館』130-131pp. にはフォスターシアターについての取材記事が掲載されている。